

13	東京大学教育学部附属中等教育学校	H28～R1
----	------------------	--------

## 令和元年度研究開発自己評価書

### I 研究開発の内容

#### 1 教育課程

##### (1) 編成した教育課程の特徴

本研究開発で編成した教育課程の特徴は以下の通りである。

- ① 「総合的な学習の時間」をもとにした新教科「探究的市民科」を設け、各教科での学びと合わせて、「市民性」「探究」「協働」の視点を生かした6年間での系統的なカリキュラムを開発する。「探究的市民科」は「他教科とも連携しながら、他者と協働し、探究的に学び活動する中でこれからの社会を生きる市民として必要な資質・能力を身に付けた探究的市民を育成する。」ことを目標とする。
- ② 前期課程と後期課程の連続性を保つことでより有効な教育効果をあげることと、各教科と「探究的市民科」をつなぐ役割も果たすことを目標に、前期課程「技術・家庭」の技術分野と後期課程「情報」を一体化した新教科「情報・技術科」と、前期課程「技術・家庭」の家庭分野と後期課程「家庭」を一体化した新教科「生活デザイン科」を設ける。
  - A. 「情報・技術科」では、前期課程においては「各教科で学んだ事柄を、技術の窓を通して社会とつなぐ」そして「後期課程の情報につなぐ」の2点を、後期課程においては「様々な（情報）技術の原理は基礎的・基本的事項の組み合わせであること」そして「（情報）技術の活用は市民的対話で形成される合意事項、社会常識による評価を前提とすること」を習得、体得させることを目標とする。
  - B. 「生活デザイン科」では、同じく各教科で学んだ事柄を日常生活に結びつけながら、前期課程の「家族を支える一員」としての立場から、後期課程の「家庭や社会の担い手」としての立場への変化を理解し、その過程で「様々な要素を総合的に認識し、適切に判断する意思決定能力や課題解決能力」を養うことを目標とする。
- ③ 内面の醸成だけでなく、自らの考えや（「深い学び」の）成果を外に向けて明確（誤解なきように）かつ説得力のある発信をすることも多様化する社会では求められることを鑑み、小集団内の双方向性のある対話だけでなく、大勢の前で一方向的に発表する機会を、「探究的市民科」をはじめとする各教科の授業はもとより学校行事等も含め教育活動全般を通じて数多く設定し、発表技術（聴衆への配慮等、情報発信者としての態度・リテラシーも含む）の向上とともに「深い学び」の評価に生かす。
- ④ カリキュラム・マネジメントの観点から「情報・技術科」「生活デザイン科」も含めた各教科は、特に「探究的市民科」において育てたい力や資質の育成につながる「深い学び」を意識しながら指導計画を立て、授業を行う。研究

を深めるために教科を超えた授業検討会を行い、どのようにこうした力や資質を育てることが可能かの見識を蓄積する。そこから教科カリキュラムの見直しと改善に取り組む。

## (2) 教育課程の内容は適切であったか

特に探究的市民科においては、6年間を見通した系統的な教育課程となっていると考えるが、発表技術については1学年次に基本的な事項を全体で学んだ後は、各自が実践の場を踏みながら思い思いに6学年次まで発展させていく形となっているので、4学年次（または第3学年次）に応用的な内容を全員共通で体系立てて学ぶ機会を組み入れた方がよいのではないかという意見も出た。

「情報・技術科」や「生活デザイン科」は、中学校と高校での学習内容（「技術・家庭」および「情報」「家庭」）を6年間の中で整理し直し、実験・実習など実地での学習を豊かに行える編成を目指したが、生徒たちもそうした実践的な学びの充実を高く評価し、学習内容の定着だけでなく、発達段階に応じた実社会への眼差し（課題意識）の醸成も見られた。

## (3) 授業時間等についての工夫

### ① 「探究的市民科」

第1学年～第4学年の授業時数は、学習指導要領での「総合的な学習の時間」に準じ、その年間標準時数内で実施した。第5学年～第6学年については、月1回の個別の面接指導を中心にその間の課題提出や発表会も含め、年間標準時数に基づいて実施した。

### ② 「情報・技術科」

授業時数は第1・2学年において「技術」を週1時間、第3・4学年において「情報・技術」を週1時間、第5学年において「情報の科学」を週2時間実施した。第1学年～第5学年に必修科目を設置し中高一貫した技術教育を施せるようにしている。しかし、技術教育の4領域を扱うには時間数が十分とは言えない。

### ③ 「生活デザイン科」

授業時数は第1・2学年において「家庭」を週1時間、第3学年においては従来の「技術・家庭」より0.5時間多い週1時間の授業を行った。市民性育成のため、内容が多岐・多様になっているが、第3学年・第5学年で少人数授業を取り入れることで、一人ひとりの実習の機会を多くすることや限られた時間内でも内容の定着を図りやすくしている。なお、卒業研究のテーマを決める時期である第4学年には設置されておらず、連続性が途切れている点では課題が残る。

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

#### ① 「探究的市民科」

- A. 「入門1」においては、まず学年全体で6月末に行われた宿泊行事に関連するテーマについて、4月の遠足とも合わせて全員が4～5人のグループに分かれて調査活動を行った。夏休み前にはクラスごとの発表会、10月の文化祭でもブースを設けた発表機会を設定し、その調査結果を口頭および壁新聞形

式で披露した。現在は、クラス毎に「身近な場所についてのフィールドワーク（東大探検）」「ICT 機器やそれらを用いた情報収集・発信のリテラシー（情報とメディア）」「多様性（他者理解から国際理解へ）」の3つのテーマをローテーションしながら学んでいる。「入門2」では、まず和太鼓・演劇・狂言・ダンスの中から各自選択したものを通して「表現」について半年間かけて深く学んだ後、学校周辺のヒト・モノ・コトについてフィールドワークを含む調査・研究・発表活動を行う「半径2km研究」を通して、探究的な学びを実現するための学び方・スキルについても学ばせた。

- B. 「課題別3・4」においては、「自然・環境」、「科学・産業」、「創作・表現」、「人間・社会」の4つの領域からなる13のテーマ別講座の中から、生徒に1講座を選択させ、3・4年生が一緒になって、そのテーマについて、フィールドワークを含む調査・研究・発表活動を行いながら、深く学ばせている。開設する講座については、担当する教員の興味・関心を第一にしながらも、様々な生徒のニーズにも応えられるよう幅広い構成になるよう調整した。また、生徒の関心の幅を広げることや市民性の育成の観点から、第4学年次は可能な限り第3学年次に選択した領域とは別の領域の課題について学べるよう、生徒の希望と人数バランスを考慮しながら各講座へ割り振ることに努めた。

[今年度の開設講座名]

<自然・環境>

①バイオでGo!

②東附アグリチャレンジ

③Scienceしよう!

<科学・産業>

④農業実習を通して6次産業を考える

⑤体感する数理

⑥数学史を学ぼう

⑦生産技術入門

<創作・表現>

⑧歌仙を巻こう Part12

⑨花

⑩文楽通になろう6

⑪総合芸術から学ぶ表現の世界II

<人間・社会>

⑫茶の湯の道・学・実

⑬英語学習法研究入門

⑭アクセシブルデザインを探そう～バリアフリー2019～

- C. 「卒業研究5・6」においては、各生徒に5年生と6年生共通での一つのテーマを設定させ、担当教員の指導の下で約1年半に渡り調査・研究・発表活動を行わせながら、個人探究テーマについて深く学ばせ、最終的に6年生は平均20,000～30,000字に及ぶ卒業研究論文を提出させた。

## ②「情報・技術科」

- A. 新教科「情報・技術科」においては、第1・2学年において科目「技術」を履修させることとし、表現性を重視した材料の学習と材料間での比較による特徴の整理、材料利用の歴史、製図、加工実習を第1学年で取り扱う。第2学生では機構学習から動力史のエネルギーの変遷に触れながら、加工技術を踏まえた商品開発を実際に行い、技術史の流れを踏まえ、今後の変わりゆく新技術に対応できるように時系列で指導していくと同時に、他教科との関連を意識させ、商品を多角的視点から製作させるものとする。また、電気エネ

ルギーの利用と情報技術の関連についての接続を意識し、発電の学習から電気・情報通信へと進むものとする。この2年間は1学級単位で授業を行い、生徒40名に対して教員1名で対応する。

- B. 第3学年においては科目「情報・技術」を設置し、義務教育課程ながら週1時間を半学級編成で確保し、情報技術を利用したものづくりや基礎プログラミングの学習、計測制御の内容を取り扱うものとする。第3学年の授業形態は、半学級編成で実施し、情報技術を利用した産業、プログラミング実習、計測制御の内容をとし、生徒20名に対して教員一人で対応する。
- C. 第4学年においては1単位の必修修科目として「情報・技術」を設置し、学級単位での授業を実施した。授業では、コンピュートショナル・シンキングを通して、問題解決力や探究の力を養う。
- D. 第5学年においては技術教育のうち情報分野の総括的な科目として「情報の科学」2単位を学級単位で実施し、コンピュータやネットワークの基盤となる技術の学習をおこなった。
- E. 第6学年では自由選択科目として「情報特論」を2単位で実施し、プログラム言語Cによるプログラミングをおこなった。一方、同じく第6学年次の自由選択科目である「生産システム技術」は希望者が少なかったため開講されなかった。
- F. 情報・技術科の大枠としてブラックボックス化した技術の原理を概念的に取り扱うことを主眼とし、その包括的な内容、及びカリキュラム化を目指して教育課程を編成、実践した。

### ③「生活デザイン科」

- A. 新教科「生活デザイン科」においては、教科の学習目標である「自立」と「共生」をキーワードに生活に関わる事から積極的に興味を持ち、他者の考えも取り入れながら、豊かな人生を構築できるような判断力や実践力を育成している。そのため、どの分野においても、最新のニュースを題材に、今社会で話題になっている問題について言及し、それが自分たちの生活とどのように結びついているのかを自覚させると共に、そのような話題から、自分が追求したいと思う課題が見つけれられるような問題提起を行っている。例えば、食料の自給率と環境問題、生活習慣病と健康食品、フードロスと飢餓問題、ファストファッションと古着のリサイクル、少子化対策・保育の問題、消費者問題・成人年齢の引き下げ、安全・安心な住まいなどである。
- B. 「生活デザイン科」では、前期課程、後期課程で家族・家庭、衣食住、消費経済などの分野をスパイラル状に学習する。そこで、発達段階に応じた課題設定を行い、課題への理解が深まる工夫をしている。前期課程は身近なところから始め、実物や実体験を共有しながら、コミュニケーション能力や判断力、探究心の育成などを図る。後期課程は、世界とつながり、プラス面とマイナス面の比較、資料分析など多面的、複合的、抽象的な課題設定も加えて、自分たちの生活への興味・関心・実践的態度などを高めるよう工夫している。第1・2学年における家族の一員として行動する立場から5年における家族を作る立場、社会の一員として行動する立場への変化を今まで以上に意識し、第3学年の授業でつなぐようにした。
- C. 探究的な学習についてはどの学年でも重視しており、特に少人数制を行って

いる第3学年と第5学年では、話し合い、インタビュー、発表、討論等に加え、実験や実習といった体験の機会を重視した授業を活用している。例えば、保育分野や高齢者の分野においては、保育園見学、妊婦・高齢者体験などを積極的に取り入れ、少子高齢化社会の現状を協働学習の中で多面的に考える。これらを通して、現代社会や各自の課題を自覚し、最終的にはどのような社会をめざすか、将来自分が子どもを直接育てるか、否かなどの個別の状況に関らず、社会の一員としてまた、一個人として自分自身の視点で適正に行動できるような基礎を固められる場とする。住生活分野での住宅設計であれば、自分のライフスタイル、ライフプランと結び付け、それにふさわしい家を設計する。その際、自分自身の考えを持つことはもちろんのこと他者のライフスタイルやアドバイスを議論の中で取り入れることで、より深い学びを成立させることができる。これらは、探究的な学びの集大成である卒業研究と深く関わっている。

- D. 「生活デザイン科」で扱う内容は、個人の生き方につながるもので、正解はない。また、常に変化するものでもある。このオープンエンドの課題について自ら考え判断し、行動できるような態度を育成している。

#### ④全校体制

本校は平成17(2005)年度からすべての教科において「協働的な学び」に取り組んでおり、どの授業においても、他の生徒の意見を聴き、一緒に考え、自分の意見を述べ、自分の考えをまとめる、といった主体的な学習活動が共通で行われている。

### (2) 指導方法等は適切であったか

- ① 第1・2学年の探究的市民科「入門1」および「入門2」においては、教科学習だけでなく、学校行事とも連携して進めたことで、生徒も意識の上で統一感をもつことができ、一つの目標に対するそれぞれの学習活動の意義(位置づけ)を理解しながら取り組んでいた。
- ② 第5・6学年の探究的市民科「卒業研究5・6」は、2～4人の生徒を同じ教員が一年半余り継続的に担当する全校体制を通じて、経緯を踏まえた評価や指導で探究学習の個別最適化を実現し、主体的な探究活動を促すことに成功したと考える。また、教員だけでなく一緒に指導を受ける仲間(各自の研究テーマは多種多様で、異なる場合が多い)も固定されているため、毎回それぞれの取り組みから気付きを得ることや、大略を理解している同級生から違った視点の意見をもらうことで、探究に広がりや深まりが増したと評価する生徒が多かった。
- ③ 第3学年の「情報・技術科」および「生活デザイン科」については、ともに半学級編成にしたことで、一人ひとりの実習の機会を十分に確保することができ、生徒の実践的な学びを充実させることができた。また週1時間ずつの配置により、「技術・家庭科」と比較して一つひとつの内容の学習間隔・学習期間がより適正化されたと考える。

## Ⅱ 実施の効果

### (1) 生徒への効果

- ① 卒業生へのインタビューおよび校内研究会での教科の枠を超えた協議の内容から、入学当初よりどの教科も「正解」（が既に用意されていること及び、須らくそこへ到達させること）を前提としない授業が展開されていることが分かった。そうした学習を通じて「自分の答え」を作り上げていくスタンスが共通してとられていることで、探究においても自ら答えを生み出すことに生徒がすんなりと向かえるようになっていくことが推察された。
- ② 各教科において対話的な学びだけでなく「書く」機会が多いことは、表現力だけでなく、自己内対話を引き出しており、個の確立を促す環境や互いに尊重し合う土壌が生み出されていることが明らかとなった。  
このことは、今年8月に行ったインタビューの中で卒業生が大学進学後に感じた他校出身者との違いとして「何かに熱量を傾けて取り組んでいることを互いに日々感じられた」「建設的に意見を出し合い、どんな人とも臆せず活発な議論をすることができる」点を挙げていたことから示唆された。
- ③ 1学年120人のほぼ固定的なメンバーで課外活動なども含めて6年間協働的に学んでいくため、一方的な決めつけでは間に合わない他者理解の必然性が生じており、その結果、多様な考えや価値観と折り合いをつけることや、それぞれの背景に想像をめぐらせて物事を考えたり進めたりする力が培われていることが卒業生へのインタビューから分かった。
- ④ 平成31年3月（第3年次）に実施した6年生へのアンケートの回答<sup>※表1</sup>から、「情報・技術科」および「生活デザイン科」における実践を通じた学びが、実生活への眼差しや学習において自分の感覚を養うことにつながっていることが確認できた。

表1 具体的な生徒の記述（一部抜粋）

情報・技術科	生活デザイン科
<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術で「やってみないとわからないことがある」ことを学んだ。</li> <li>・自らインターネットやパワーポイントを考えながら使ったことで、特に卒業研究の際に、発表や情報の選定において非常にやりやすかった。また、自ら物作りをしてみようという意欲につながった。</li> <li>・暗号のこととか、今までギモンに思ったことすらない（知らないということにすら気付いていない）ことを知れた。</li> <li>・基本的な概念の組み合わせで、複雑なシステムが成り立っていることを、手を動かしながら学べた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一つ一つの分野を受けていくごとに、自分の進路と将来像を具体化することができた。特に洗濯の授業は今の生活にも役立っている。</li> <li>・1番印象的なのは保育実習であり、実際に小さい子と関わることで知識だけでなく対応できる力を付けられたと思う。</li> <li>・授業の枠を超えて実生活で役立つことが多かった。</li> <li>・自ら服を作ろうとはなかなか思わないので、イーザーパンツを作った経験は貴重でした。</li> </ul>

⑤ 平成 30 年度卒業生が、本研究開発初年度である平成 29 年および平成 30 年、平成 31 年それぞれ 3 月に実施した「探究的市民科が他の教科に比べて、それぞれの資質能力を身に付けるのに効果的だったか」についてのパネル調査の回答結果<sup>表2</sup>から、「与えられた情報から自分なりに考え、判断する力」が 3 年間を通じて高い割合で評価されており、第 4 学年（課題別 4）から第 5、第 6 学年（卒業研究 5・6）にかけて高く評価する生徒の割合が最も上昇したのが「他の人の考えを聞き、自分の考えを見直すという態度」であった。

表 2 探究的市民科の方が効果的身に付くと生徒が考える資質・能力

資質・能力	①	②	③	④	⑤
第 4 学年	83.5 %	82.6 %	68.8 %	63.3 %	75.2 %
第 5 学年	86.1 %	88.0 %	71.0 %	71.0 %	81.5 %
第 6 学年	86.5 %	83.3 %	79.2 %	66.7 %	83.3 %

<平成 30 年度卒業生が思う「他教科よりも探究的市民科で身に付く資質・能力」>

資質・能力①…与えられた情報から自分なりに考え、判断する

資質・能力②…いろいろなメディアから情報を得て、問題解決に活かす

資質・能力③…他の人の考えを聞き、自分の考えを見直すという態度

資質・能力④…他の人と協力して、課題に答えを出そうとする態度

資質・能力⑤…自分で新しい課題やその解決方法を探し、自分の意思で学ぶ態度

⑥ 前項とも関連するが、パネル調査の別項目「探究的市民科で主にどんなことを行ったか」について、平成 30 年度卒業生に注目して回答の推移を追う<sup>※表3</sup>と、より高度な知識や情報が必要となる卒業研究において、専門家などに聞く活動が横倍になっているのに対し、身近な人との意見交換は増加し続けていることが分かり、権威ある人の出した“正解”だけで満足せず、自らの“よりよい応え”を納得できるまで導き出そうとする態度、つまり市民性の一側面であるアマチュアリズムが醸成されていることが推察された。

表 3 「探究的市民科」で主に行ったこと

	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
専門家やそのことをよく知っている人に質問したり話を聞く	63.3 %	63.6 %	61.5%
友だちや先生に質問したり意見を聞く	78.9 %	83.5 %	88.5 %
友だちや先生に自分の考えや意見を言う	73.4 %	79.7 %	81.3 %

この傾向は、本校における様々な授業スタイルについて、それぞれどの程度好きかを尋ねた調査(平成 30 年度の結果を利用)において、「先生が黒板を使いながら教える授業(教師主導)」と「友だちと話し合いながら進めていく授業(協働学習)」を比較<sup>※表4</sup>したときに、低学年(第 1・2 学年)では「好き」と答える生徒の分布に差が見られないのに対し、高学年(第 3~6 学年)では協働学習を好きとする生徒の方が教師主導を有意に上回る分布となっていることから窺えた。

表4 「教師主導・協働学習それぞれの授業スタイルは好きか」

第1・2学年 (283名)		協働学習		第3～6学年 (428名)		協働学習	
		いいえ	はい			いいえ	はい
教師 主導	いいえ	3.5%	14.5%	教師 主導	いいえ	7.7%	17.5%
	はい	13.8%	68.2%		はい	10.0%	64.7%

⑦ また、平成30年度から前述のパネル調査に「わからないことがあっても、何とかして解決しようと努力する」か否かを尋ねる項目を加えた。結果<sup>※表5</sup>としては、学年が進むにつれて「何とか努力する」生徒の割合が概ね増加する傾向が見られたが、単年度の実施であるため、本カリキュラムの効果によるものなのか、いわゆる学年カラーによるものなのか判断することはできなかった。また、第3学年と第4学年の間で落ち込みが見られたのは、中学校段階から高校段階へ上がることに伴う学習内容の難化によるものなのかどうなのか。この項目への回答と、主要五教科の評定平均値および平成30年度4年生の第3学年から第4学年の成績推移とそれぞれ相関が見られたものの、継続的に調査を行うことで今後検証していきたい。

表5 「わからないことがあっても、何とかして解決しようと努力する」

平成30年度の学年	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年
「とてもあてはまる」「あてはまる」と答えた割合	58.3%	70.3%	72.6%	60.3%	69.1%	69.8%

このパネル調査では「わからないことや知らないことを調べるのが得意」か否かも尋ねており、参考として平成30年度の5年生(現6年生)の回答を3年間に渡って見ていくと、「わからないことや知らないことを調べるのが得意」な生徒の割合が **69.2% (第3学年) → 69.8% (第4学年) → 79.8% (第5学年)** とこちらも学年が上がるごとに増加しており、第4学年の時は得意でなかったが第5学年で得意になった生徒の数(20名)は、第4学年で得意だったが第5学年で得意と思わなくなった生徒の数(9名)の2倍に上る結果となった。

## (2) 教師への効果

⑧ 新設教科をはじめ、各教科で目指す「探究」志向性、「協働」性、「市民性」を基礎期・充実期・発展期の発達段階ごとにまとめた表を作成したことで、自分の教科で身につけさせたい資質・能力を系統的に整理できただけでなく、他教科の学びについてもコンピテンシーベースで明示的に確認することができた。視覚的に縦・横・斜めのつながりを捉えられるようになったことで、日々の実践の中で意識的に連携を行いやすくなった。

⑨ 「情報・技術科」および「生活デザイン科」それぞれの独自性に基づく6年間を見通した内容編成および順序配列とそれを生かした系統的な学びが実現し、

それぞれの教科がねらいとする資質・能力に焦点を当てた連続性のある実践が可能になった。

- ⑩ 逆説的ではあるが、キーワードの曖昧さが教科内および教科の枠を超えた協議への必要性（動機）を長期にわたって生み出し、教員同士の継続的な学び合いにつながった。その結果、各教員の授業に対する見方や指導法、目指すゴールや評価方法についての理解や考えが深まり、広がった。



図1 本研究を通して得たものとして教員が挙げたキーワード

### (3) 保護者等への効果

- ⑪ 保護者向け学校評価において、これまで同様、探究的市民科が充実していることに対する評価や6年間の系統的な学びに対する評価がともに4.5（満点5ポイントの平均）で全38項目中最も高く、「自主的な思考と判断力を育てている」（4.3ポイント）、「伸びやかな表現力を育てている」（4.1ポイント）など、本研究でねらいとしてきた資質・能力が生徒に定着していることを高く評価していることがわかった。

## Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

### (1) 研究体制について

- ① 研究を促進するために掲げたキーワード、特に「市民性」の定義を実践レベルで十分に共有するまでに時間がかかってしまったが、新しい方向性（視点）を打ち出す際には、策定段階からの関係者全員の関与とともに、具体的な生徒の姿を通じた議論が必要かつ有効であるとわかったので、次年度からの新たな取り組みに活かしていきたい。
- ② 「情報・技術科」「生活デザイン科」を新設したが、学習指導要領上の教科で

ある「技術・家庭科」と「情報科」「家庭科」の担当教員および授業数が比較的少ないことに十分配慮できていなかったため、この2教科を当初想定していた新教科「探究的市民科」と他教科との橋渡しの役割として組み込むカリキュラムデザインには無理があることが分かった。このことから、こうしたカリキュラムの中核を担う役割を果たすには、ある程度の教員規模と授業数が確保できる教科であることが望ましいと考える。

## (2) 効果検証について

- ③ 中等教育学校6年間を見通した系統的な学びのカリキュラムデザインであったが、4年間という研究期間の制約を考慮し、同じ生徒集団の第1学年から第6学年までの縦断的なデータを収集することに替えて、部分的に学年間比較による効果の検証を行ったが、想定していた以上に当該学年の特性による影響が見積もられたため、本カリキュラムによる効果と学年カラーに起因するものとの分別を十分に行うことが難しかった。
- ④ 最終年度になって、卒研ハンドブックに代表されるような形成的評価が本校のディープ・アクティブ・ラーニングを可能にする要因の大きな一つであることが分かってきたため、これまで多くの教員によって暗黙知として蓄積されてきたポートフォリオを中心とする実践の形式知化を図った。今後それがどんな点でどのくらい生徒の探究的な学びを支えているのか、量的データも用いて検証していきたい。
- ⑤ 協働的な学びにおいては、明示的でないものも含め常に他者からのフィードバックがなされており、それが重要な形成的評価となっている可能性が示唆されたが、方法の難しさもあり検証に手をつけられなかった。今後、評価される側だけでなく評価する側にとっての効果も含め、継続して研究に取り組んでいきたい。

## (3) その他

- ⑥ どんな内容を扱っていくかを中心とするコンテンツベースのカリキュラムと違って、コンピテンシーベースのカリキュラムでは、教科内・教科間の情報交換だけでは「意図」「主観的評価」しか共有しえないことが多く、連続性のある実践を行うためにも評価手法の確立が急務であることが浮き彫りになった。そういう意味でもポートフォリオ評価はコンピテンシーベースの指導に適していることが分かったので、評価の蓄積について要点（誰が、何を、どのように、どんな形で）を整理し、有効な評価手法を開発していきたい。特に、他校での実践へ広げていくには、負担感の増大を避けるような工夫が必要と考える。
- ⑦ 「探究」志向性、「協働」性、「市民性」の育成については教科学習を中心に行いながら、それら3つの中身については教科の壁を越えた議論の中で吟味されていくため、教科の独自性を生かした授業実践と教科の枠組みに囚われない協議の両立を図ることが難しかった。